塩尻

五十三

太政官文庫
和書門
二四九七 獅
一〇一 函
六五二 架 冊

内閣文庫
和書
一四九七 類
六五 號
二一二 冊
二二二 函

内閣文庫
番號 和 11497
冊數 65 (53)
函號 211 302

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

○尾加津嶋社之異説 何人の作なるを知らず 或人の家に傳写

本社三所

第一素盞烏尊

第二大安南智神

第三小男子神

別社一所

憶感社 称家守神祭神事代主命及疫疹之神ト云云

本社初中嶋郡鎮座号大神神社ト云云

孝霊天皇御宇降臨 欽明天皇元年鎮座 嵯峨天皇

五十三 内二二七九〇

弘仁九年天下疫疾流行仍差勅使奉幣朱雀院
天慶六年宮号村上帝天徳三年造宮一條院正暦
五年天下疫病流行勅以中嶋郡大神社移建海部
郡津嶋末社四十余座云云神職神氏亦移住津嶋同御
宇長徳元年勅号津嶋天王太神宮使奉宣幣云云

右畧書之

此記奥ハ天喜元年五月二日の字ハ
右の説の疑ヒ乃一ニハ此所の中ナニヤ三

今の社説及ひ京師祇園乃神傳と大ハ異ハして
旦大安南智小男子の文字古記ハ記所欲別社
憶感と以てヲカンと倭訓ヒ是ハ意乃俗讀ヲ
述キ或人曰ヲカンとハ悪寒にして時疫の神ハその
故なりと一発すし憶感の神社ハ清潔の別社ハ
らに吊カ本國帳カ解との考述ヒ知りて家守の羽とすれ
こと是謂ゆし柏森居森葉ハ地名ハして神牛頭
天王と称りし説と云説ハ違人ヒる代主と記録と

に八所會ひ給ふ靈天皇の御宇降臨給ひし欽明帝
の元年鎮座の說其據なきに但し社家の傳に
鎮座と云云 弘仁九年の流疫國史に載せ記し
に世に流布せる心經秘鍵の跋語に弘法師
の作と云傳へたれども後人杜撰なる者歟 海如僧正
解云 彼の跋に弘仁九年人疫と云ふ事なくして
津嶋奉斎乃說とのせたり
類聚國史一百七十三災異部に弘仁十四年二月
天下大疫死亡と云云 延ぶ津嶋奉斎のうつし
天慶天德比宮号造営ふるうず
本國帳等宮号と書せし東鑑に津島社といひ
八宮号似称せらしと明帝
正暦五年大神神社を移し奉れとふ日次御
記に云ふ大神神社八ツ猶中嶋郡勢田庄
宮地花池村あり 社一旦荒廢の時所正体を一言
の本殿に納む
桜すれよ嶋郡於保村に天王祠あり延喜式

の神名帳に載れる本にいふとを大神神社と誤る
て書て延い大神社也多神社也多神社也多太と和訓延ふる通し書也
度會延昌ふと辨ずれども明白なり太國帳の解
不知の者は神社を天王と為て以て津島社の
根本と為すなり且太神社も牛頭天王
にかなり多氏の祖神の羽なり
中嶋郡二宅村牛頭天王旧墟なり今猶祇村
の神人等二月津島に往て神供を敬て蓋し二宅

村も津島の枝なり然れども者ハ樹なり故に社家延喜式詳
大詳し長德の勅号天王太神と称しまと云況是々
し天王とは疫神牛頭天王にてもし仏教
出くり吊い牛頭辨ず表し太神云の号通世譯ず諸社ず
古しへこの号と称す乳宮伊勢加茂等乃外乃乳
るるくし嶋原不樂乃妄誕辨ず不遑ず
奥書乃天喜元未の字も亦後人の所書其文字位
令泉帝の時寛文法ず何かる乳章附寺社の縁

起ル事ハ[illegible]乃ニ[illegible]と雖[illegible]や

或日頃日真野時縄津嶋祭記と述して仰紙[illegible]し

記ニ[illegible]きゝと云日代習の記如此なり但し彼も

畧云據の附会なりと[illegible]ハ[illegible]こゝにして益

なし故に細[illegible]とくのゝ波合記を見さる[illegible]ハ津嶋

実乃本據をもゝずと[illegible]ハ[illegible]書紀に[illegible]者ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]つれ[illegible]ハ[illegible]後加ハ神國[illegible]

牛頭天王と[illegible]し國[illegible]て[illegible]七所の天王皆六月祭

[illegible]月の祭紀津島より[illegible]

○八月の末荊蕚を祝こして人のさゝ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

う[illegible]

[illegible]

○東都より下野國古河府へ十四里半[illegible]

へ四里[illegible]ハ[illegible]宮へ七里余[illegible]喜連川へ五里

鎌倉管領足利家の[illegible]

[illegible]ハ[illegible]れハ春氏と称[illegible]れ祭復地ハ喜連川

[illegible]大田原へ四里[illegible]六里余の路とかん堰の

明神と称す　下野國と白坂陸奥國との堺なり

この洞の東と奥と峠とい（ア）二本杉白坂より二十六里江東五里猫島と称するところにもしらし伝教庵の住し旧墟なりと

右は近きこの東西の脚せし伝の籍紀し毫

事実をもてこれに筆せり

○拠州愛智郡大喜村はせいし勢田の洞宮尾張氏の別支住せし地なり文日堂の心憶若之を称

丁数紙なりと　俗ニ八幅と称ス　延喜勢田の遠江所載俗体の御形て軀と納免ゑ寸まるハ鈴社なり伝教寺城勢田の奥院なりと詩なり伝教なるなり

○韓子曰儒以文乱法勇以武犯禁謂之遊俠ト云云

鳴呼文の徳は仁義武の徳は義と是人住国有の明理

覚法と称り物ふ沙犯するのみなれや物ふ文流れて

等伝来し武蹟まして兵伝恣まして伝ふ憲伝

捨て律丈背尺倫ふ道く答歟ま近ひ伝ふいれ

七亦未の詔ありて夫婦ハ五歳の神祇為に道あれ
と謹み遵ふ倭ふ孔の流れの風とるに
て

○或人問賢初要集に皇極天皇四年てに為大化
元年自此以来有年号立極すれ共てに寿徳
帝乃えるを為れ皇極日ふけて証すれ
行ふ日延証者乃微を所謂天人王帝位の年共
受禅の前に孔先代の年るすく所多れをの

一年にして二主あるを年をあるれ且先主崩ぜれ
年代を孔ハ新帝位を踐ものとを亦自えを
とさをして自身に為へり且ひ玉ハされ叙
旨ふ故ふ後の年号改元しまる於て亦孔
ハかるを帝位の明年紀をしてし皇年寅
新天るの元年るれ乃ふ

○唐百官志ふ訓勅冊の文ハ天子用し今ハ皇太子
用ふ教ハ親王用符ハ有列ふ下等いへを諸國唐

の例を用ゐ参議小松王殿の命令の旨とし小遣へる者

○吳寛と云ふ一人官吏訴帰里に臨れとゆりし其妻の

遊女とともに逃避せんとし吳寛先右小諸ていそく

彼等貪迫の故不得已して力ゝる婦とるゝを其

途等これを苦ることを能ず恥や安て其糊口の計

を思へりんやと自事故の爲て迷行せしとやまし

王旦といひし人宦中書丞又うへらるゝ大早す路小

狂生天行といふものゝ王旦に指て大に呼ていく

天軍百性困て苦悩す然て相乙主孫をうけて

さゝ物やすれとをうばやと遂小其所物の書狀をもて

ゆげうゝ王旦の首を中に作り先右されとをて京

尹よおくんとせ王旦遽小曰彼の言者過小ゆゝれせ

彼るんの罪ゝゆゝんとて命して赦を請そゝ

吳寛の事小鑑古録小記し王旦の事小國老談苑又書せ

嗚呼官小ある者の公忠實厚にして私なること乃

二人のごとくゝ小無しゝ其論べきもの也

○説苑ニいはく集解に鳩まひ水鳥の日ニいはく小鳥番
我まちに東に行んとす始いはく何の故ぞ糸いはく卿
人皆我鳴声をあくむ故に去ると始いはく子はいふ
あるあめ一のしゝ吟ぜずして東西に使ず其不
の人まこゝろ声ぜにくまんとこひしとまさるゝ彼の
集の類ゝ仏経十輪経小悪駝師子及び彼のごとく
八愚慢ずして人と諍怨し利養を招集せんと
と計ず習俗といへる人夫恥さるゝあんや

○或人問番木鼈を二十ンとゝ蓋し蠻語ならん吊曰
本草の異名ふるに馬錢子といへる唐音ニアナエンツセ
ニ十ンハ此のゆゑ

○裏頭扇我國の未廣の類ゝ考ふるに以前團扇
用ゆ明初折扇を用ひ立雛組ふるゝ
八〆の唐扇の製ハ明以来のを倣ふ
裏頭扇ハ我國の未廣の類ゝ

○倒地從地起 法華 ヘヘ勺 騎駝負駝 通玄 以血洗血 唐書

悟休得

○物の性門くして其氣となるれを其生死をなす

稻は木旺して生し　二月の中　金旺して死　八月の節に入て田りす

麥は金旺して生　九月の中ふ　火旺して死　二月の中に入て田りす

のこるもの黄梁の盛暑ふ負て物をの雪程ふひ

うくし花はふりて其生氣をるすく　桃李は春風を

うけて笑ひ菊黄は秋霜を衝て馨し　没やすきに

能久ふをもつ心ふらを野ふ匍ふ類一物の中

の中まで教授ありて一様るずんをもつ一れらと思

（い心知愚ふり命貧富ふり君子小人の趣を異みせる

さ為豈元をもつ（きや為れとも人の性皆若氣質

の蔽をやしは誰ら善人るさ氣質ん天下のもの

一節の厚（き有て世の為ふ棄られず人和て世

ふ棄（ふを物ふ不如者ふり朱子不自棄文

ふれら為ふ施せもし能讀て志を立（ふらと

一朱先生　孫源の從氏の為ふ他ふらとりんどを夫

下代人其頑愚を警其奢侈を懲して善に遷り
八豈世に棄てられて固陋に淪るんや此れ明
儒參議陳憲が詔添て世に行るし 嘉靖二十年
の刻板し洪武に重板して偽ふれとも其乃
かきいるし
○義 說文仗我者人言之
我割之為義也
古旨俄書洪範遵王之義 叶音魚羈切音
宜 易大傳禁民為非曰義

汉智切音異宜也 延知切音夷姓也
○羅の字周代まて皐れこみるし秦始皇其字皇
に似るを忌て改羅の字とかせりとそ
憲 音忒 聽聽欲以貞 云出聽 他定切 聆也
俗聽の字改もりて聽の字と通し用れ淆誤
○奔名所云
時のまれなるはかりしかとも川ろとかうしを
通の五時 油やまん

四季の風せはしく鳴く虫の音のふるさとをしたふ

○人間万事老去て無味服下四時秋来て最愁人

きりぎりす夜の月に泣くさむしろ秋こそ

仲秋面白くいとつゝにゆせ後の名月の月さへ

ふるし弥さく夜ふるまでひとむらく秋の下に

ふるこゑちゆ

竹篁秋元露風寒

轉採菓花冷服着

燭生月曠十三夜

雁声遠落夜漫々

○古へ詩歌小砧多詠せし大ら賤家の業なりしかること

ろ〳〵聞てせしさ面せうこそ乃ちきぬ打音の

げかゝゆるとしふ人ものを多とされとるめらいまへは

賤民い麻布乃ミ着作ら決よいとう布を織こ作る

きて綿作入を服せし為すてきぬ音ゆげかとゝ

面しかのとれい丈綿の實作へ絲とし衣に織

てきぬ作りし着作れとう麻乃衣を業為て

[illegible]りなこし・琉球朝鮮琉球ゝ

めて夫まて木綿と第て三名暖小侍紙李世乃
天物といふべし
或人曰砧八賦民乃こにうたゞもへハ官家ゆゑ
ま夜打とはいひしやらにを屋しハ必何と曰夫ハ
漿衣の緒乃打きぬとて糊ふるめきゆゑ夫か
ゆゑ打はやゆゑふ事也延代ハ板にて別
製ひ打きぬ也ハをふめぞしなふ事
乃砧を絶し和学に讀しハ古ひ乃業の也

めるしるを派せしかを用をにあるを
○俗談小樊田の南門初海上門と榜せる湖ゆく
満来ゆしを弘法大師海蔵門と額し給ひしと云或
云蔵の字意如何と問云華厳毘盧遮那品に
毎逢海龍門の字ゆゑ逢念佛之時の異称也昔此門
蓋し逢ゆ紙いはしらゆ文字ゆ海ゆ古頌乃を御を
てかを作らしを問しをくを作らしをハ文字歌の
を納めゆゑと春敲門乃額ハ文字し明良

〇田嶋弘所家ニ藏ス侍ル延ハ東ノ方ニ建シ後田嶋家ニ藏メシ小地道ノ真跡ニくくひろひたるなり

〇宇佐大夫ノ家ハ代々ハ彼の家譜ハ之ヲ所ニ大夫司池守時ニハ宇佐の八幡ノ真ニ式佐江東宮祢ヒ古ヘ大学寮東西の曹ニ菅相丞江相公の神像を祀リと菅家ハ世に普く知ル江公真名如何云ク

延ハ二乃ヲリ

〇江相公 従三位大江朝臣音人延平城帝乃皇子四保親王の男大江始祖ク元慶元年十月三日薨六十七歳

後江相公ハ納言大江玉例の男参議正四位下朝綱迄ヒ天徳元年十二月十八日迄七十一歳

花山院宣奉の御師ニ乃ヒ出家ス寛和二年六月十日出家の暴の所ニ乃ヒ終ル

又大江定基参河守ニ愛妾ヲ出家ス寛和二年六月ニ京風ヲ

やうて侍とるらし

花山院ハ後まこと浦ヒのきこへハ定基ハ恋心侍都の英子ヲ出家と寄せ侍ル

流して其名を異邦の書に日本の圓通大師
と称せし出家の因縁ハ多くハ世に聞えたる
ものなれども起りハ紀世を捨て人も
多くと共みさ仏正しく求とそなてめて多くを
ハりめる人又ハ仏法

○りち鳥ハ春乃初よりいか初ゆ鳥ハ秋乃田に
おくれし呼子鳥ハ深山乃ものとしてかなり高
ハ古今集傳授乃人なりてふしかる詞乃たれ

とを出すべ仏事乃さまたけ乃を彼乃迷
うと、ものへよう云伝へる乃名多し大ようとか
をし仏物ハ言にもまじれしいろ堂上方乃仏
しへた多し

常詞鳥 ふるきたと

真鳥 雑ざこ但し雑の中にうもそとふ乃ハ鶏
しいへるハ此ものし

白鳥 鷺さと

なるちとり 大ぶされ部ふハ 汗絲毛 雁やとふ

花鳥はぐめさ
尾花島　鶉さふ一
ふれこ作
かる彩色多し第文かとすまこたしうるめ名多
○千町の堤も蟻の穴もとゝ崩るとふ野俗の諺を
誘うにも同し高低いへを
一紙之蟻礼能穿連山之埃　西方合論
○西方合論十巻明僧表中郎所述方暦二十七
年己亥十二月成

○四四　業文山去人八ゝう孔文雅の才士成しそれ沖名を
石川重之始十太夫と称ス後ニ加右ヱ門と呼　幕下に仕御納戸役俸六十石五人扶持ヲ給ス
歳二十に餘りて服小書狂をもて天性たゝしかれ
人ゆ同僚をもて いつくい家人もいつくしき
ゆくはしめとかとしらは浪人して駿州清之寺
に隠居しらくゝ学文して世ヨ比ふ比詞
人となりて慶長十九年乃冬大坂乃役おこりし時
市伊家ゆ屋しいでられる我切りし藤堂ゝ虎

す客食して宣く待たれし領地二千石然れども虎の豈
乃父蒲生氏源左衛門始関小伴爰堂家に仕へしが故ありて
立退くと待し宣えもあり國祖さきに其後
藝州に仕へて陶鄙家に遊仕さきし寄禄三十石さき
と雖本性暴乱甚しく性急にして家人どもやまされ
一旦彼僕等宣えと欺き拵へ縛り捨て去る者
我れ男祖立て難髪して京北に遁れし其対

わるくしなせし小川の婆くとも老乃浪ふりけはそうし
少誠し再ひ人間乃交祖毎ふ系と吟し月日嘯て大
手祖終へらも待し一条寺村荜星に仕る詩仙
堂八彼老人乃ちこと成り乃十境十二景乃こと
のこれ名ぢうれしてむうし詩と物乃待ふ。あそし
なりもれ

○青山九覚入道下世て　正徳二年九月十日　親族のうへ我父の友
成し人乃手こ海おろそうるもし待し一七月祖

香炉すてもうやし

古林老葉残秋落　幽径露寒杖月荒

八十九年一場夢　暁鐘声絶白雲長

○府下室井傳馬丁の高家某の子いろ利に因縁ら

ゆうり十八歳みして自出家し凡六十人余列の

霊區勝地をめぐり納経し帰りて真福寺

の内に石像の地蔵を彫し供養ず寺に

五穀を断て草衣紙衾し常に跣にして走れ庵

室日置村一物のたくはへなし只安元し念仏して人と交ら

ずりたくなり今年その知人をすすめて三十三所の

観音の像を造立せしが不日小捨縁足り其願ひを遂し

長月十八日寿経教寺其師在寺に安置し供養し者ら

開眼の後引声念仏をとなへ者く般舟三昧の庭

四衆神を送れば香花荘厳の臺六客座をかざりて

慈眼視生の垂ひいとゝ頼し彼本孔法師浄土道

場見さへ出ずいるめしれかるもなく火焼て下劣ら

ちまたにいたりて見侍りしいまし四十あまりの侍りしを
まとけしみさほらくろとりと思ひ侍りしに其日あり侍りしを
とにとはたりすとてその供養ことにいとなれは侍へを
しるとしおくりしおくに
普門振法鼓　通一輩人天
長夜金星霧　秋光滿碧山巒
嗚呼愛鎖貪伽羅縛　蠅蚋伴て人
間真嶽の艶肆と紫しと辛酸嘗ミ月をおしミ心まる

くて色欲尽しし死まいあるるんこそ世りれ故去来香厳乃
禪肆八名場利路の暄暉小似て鬱香の長布きし我と親
し貧兒幸ふ一佛子乃資ひ早く棘墻を出て宝
樹の風と弄せしさくふ如傑香人丈有香氣とふ言を
白象乃宮れ林まおるして月さへ乃ふ今朝の初しを

○十羅刹女

法華とふし崔經と其名異ろ
賀哩底　難娜・水蔵羅　鉤辛顎　迦以

六 禰縛密把羅　七 禁婆羅　八 君娜羅　九 憍尸迦

十 阿曩羅

是孔雀經乃十人羅刹女也此外八羅刹女十二羅刹女等

ゆゑ又十二大軍舍遮女八大女鬼七大女鬼五大女鬼乃ひ

十二大母十二大羅刹女等也彼經文三(番)或八四十七也

王の号ゆとゆゆしく願しけ

○洛東新黒谷　金戒光明寺　源空の影ハすゑ藝列瀬戸田の

ゆゑを　東照神君の命ふりて此寺ふむへて安置

すゆ　寛文二年二月彼影を内裏ゑ入て御所と云

○京師誓願寺本尊出現乃後寛文四年ふ至て二千年

京師瑞雲院(千本通上せの上)　兒如実の縁起ゑ圓融院の所ふ品

高嶋の富民三歳の兒を故ふくして紛うるく失ひ悲

歎の間一体の赦ふゆ弥陀ゑ父子相迎の益あり間

兒のすゆ弧弥陀ふ彫して三年此間不断念仏せ

し近地國一千日長仏の念仏の推興といへり(此後彼兒十二歳乃

時茅農ゑゑあひあひ天狗ゑゑ記せり)

此等山城国なる寺院と記せし物ふミへしら其一ニへ物
すまゝ洛乃延寿寺に弥陀乃繪像乃内一條院乃
御宇乃江州小原乃聖人といふ漢文にしるし一旦大鮒と
するとゝ得しかゝに迄にの原乃聖人朝とむへ此しらの俗
称しかゝ彼の漢文故あるして法ふ念佛者とるし死朝
又紫雲唐崎の湖上又鯉と恵心僧都横川乃
庵ゝ見て此像を圖ゝ見しとすゝ源右京朝乃
故事 風上の俗傳とミへゝ許ゝ寺院什物又附ゝ

傳記ふ所ゝかゝゝ多し
日蓮堂すゝて諸宗を誹謗悪口すれと是ゝ化すふ浄土
門ゝ対一又忌ゝ憎毎ゝ念佛無間業乃猜語を吐て愚
夫愚婦を欺誑す後又慶長十三年乃冬我カ
太神君命して正誉茶誉の両師をもりて邪徒日經来原
等と其義と論ゝしりひし邪徒妄誕の語ゝ出
すとゝ屈して帰服ゝ頃て刑ゝ処し猶又念
佛堕獄のす諸・経・論ふるきゝ池上乃日記以下當

時の能化六人連署し書狀あり延おそい京師の二十一
箇寺の連徒等も同じく延と書し大久保板倉の両家
へ咎して恥と天下にのこす也ふ且世もいこうれとおも
その例して彼徒合佛無らは悪と吐てくと惑てそし
寶永四年東都にして小西の談所の新日感しいふ所
偽大て合佛者を誡り刹八佛本行集經乃文又在して
日蓮滅度後於末法中爲續此命繫銅鉄頸誦狂念
佛至行者充滿国中家是盛也是佛法破滅時也等

この文を證據として合佛之前業の義とす（淨土宗を謗謂
すり増上檀林の学侶等聞こそ其文の拙き唐人の筆とを
ミへす文字乃違所さへ（誇さら無眼ふら造言とは聞へら
し繫頸於銅鉄と書ハ可し銅鉄の頸とハ行とく堅き
頸ふく絶倒そそ
若ハ似し新言しけりやと獻經を抜き佛本行集經一部六十巻
をミ新又曽て似ふり多る語もたしとも異類て佛本行
經一部七巻をくるかへしふふ稱する拙き文ふしか

八切こて邪慢の廣伝等造足出さる誑惑の似せ物として
書翰をうしなて負偽を正すに一言乃返答あるを及夜又
まきして東都を出奔せし實又面目もなくなるすべ
なるまゝをうこゝ京北光念寺みしてう海師信誑
すに鷹峯乃邪徒念仏兵衛の弟八郎又其家族
として書翰往復しりう海師の筆鋒又偽妄摧破して
再び慙愧を都鄙又さらし笑を末の代に伝ふるとなるべき
まゝかまつ

凡て日蓮宗の書籍に中古德の名を假造出して
とう宗義に合せるに中也多し能く服を法者
論しこと

○日蓮宗の中に一致勝劣受布施不受謗施等の教
流の邪義を立て又五逆慢の腎鳴らし誂言の所業
磨て自勝地劣の念又沉も不使の次第なり法華中
駿州冨士門徒大石寺等の一流世俗是を
門徒と唱ふ暗漢等多
世覚寺北日無邪教不受謗施の一流天下の禁し
うしも然まつと時こ無りて又別さまし

○諸施論日無り依て一致し勝劣をと毎々くくし論その
よりしを一致無得道陸在無間等の暴詔を吐きこ
す番神を以て悪鬼邪神と誹謗す其他本迹對論本
跡決疑本跡問答本跡微錄等の書ども安く見侍
法者乃言とて三(す)大我慢の炎焔あし御執の又を
揮小妖妄虚誕さしに乱者どし服を讀さしむ文
字さ一切ものとの彼の非を論へさんや凡天竺震旦
および我國古今一切の僧俗かくいさ申しく一流の中に
文を倒れし悪言乃毒吐し者其例さしにかし延
ゝと(て)日蓮の大邪見しく越り末流皆魔民とかを
いをはむへしとそ(き)ハ彼外道等の事
○文(元)弘辰(壬)季夏乃海師雅波に住て徒譚し日徒
の所立念仏無間業の邪義を開き祇す従宗城
男女九道を悔改す專修乃門に入りしを乃面をもり
し野へ(り)面し兵中に市井乃邪俗あり雅波屋遺屋等
猖狂癲鬼に所着のもく法席に乱り喧罵詭

角丁喋々たる言を吐く師揩定揶揄して其
誰誂と打せて邪徒吉を綴り歯毛を生ず衒誇
巷議人汲て叫こさふかし雅氏人其妻彼汲て
世界の俗概は筆一童子の笑と添秋毫の地を
度これを看て恐れ赤呻然として胡盧一戯は
四言を彼書尾は題す犬坂詫義 吐三冊 謹義
土産冊等 下り

糊糠紙帽　東酒樽庵

看邦上路　渡馬渡駅

訕口不掩呵々

日蓮堂曰源室八宗を兼学し且佛心宗は法華と
傳記は書せり掠すれば禪宗は栄西道元以来し源
室の時何者か源法を伝へき浮ちの偽等其他の博
と衒て考べきるきく仰ぐ人を以て原日蓮徒と為
帷を高にして却て他を詰す亦拙しすべく史山門佛
心乃血脉と伝ふること久し且圓光師の別傳なり
ふりて大師八宗の法門覚阿松尚は兼しまん

て心要を悟り給へりと延大師の時敢て禅宗あらし
と誰かうしかりしを普燈録および立燈會元等覓河
のと詳し霊隠乃佛海禅師より伝て往日祖域
及跡を師心又蓮徒の読み選擇集八源空の作
といへると浸人附記して記せる者多しと雖も未一発
すべし元て大師の筆の全本を現に高師庵山
寺乃蔵あり當時門人の傳写せし本なり諸寺
乃宝蔵又多し何とも浸深の本とふべし古本を

もすべしと妄りに疑ふを嗚呼のとるべき邪道
蓮の文筆の拙かりしを他の邪とせしとも
し訛謬を加へることあり為に至極なり
因日蓮徒二ツ院及東漸大師自筆一巻
七條教誡ありて墨痕ともに明絶なりとも
○此延乃日蓮書を着して選択集破せし延年宝永丙戌
洛下の法門寺浄土堂辯乗得道論二巻を述して彼の妄誕
悪口相鉾楯し自恥を知の甚しきを知り其中に

曰蓮ゝ筆非倭非漢故意賢又不使し實ゝ文法
又時〳〵強て筆砕孰ゝ破ゝ文盲の文体多日蓮曰ク
自ゝ唱佛名延小善成佛称歎し謗者可こしし日
日蓮ゝ徒専狂誤〻と略して書を不讀字をこい識
宗乃麟角鳳毛と称すゝ者まゝ僅ゝ日蓮ゝ筆乃ミ
其義ゝ時理ゝ謬邪解僻見猶ゝ口業を作し聖
と謗狂と罵詈を乃一ゝ其不学ゝ原く此の文のゝ
乃知何等乃詩と作ゝを所謂自ゝとは恐ハ固乃

の意成へし彼文字ゝ〻ゝ作ゝ〻ゝ乃ゝ〻ゝ又倭訓に沿て自
ゝの二字に成す又小善成佛称歎し延又何の語を作
すや等小善ゝ〻ゝ辨等文ゝ〻ゝ〻〻異之又曰彼曰法然作二巻書し延
剞劂氏漫漶して上下とす〻〻見て言ゝ〻〻〻〻〻
選択し一巻ゝ事ゝ〻乃知其如此卤莽の学ゝ〻〻〻
他を破せんとす乃日蓮ゝ所為を拙しく其書の道
理をこもせて秘謾の服をうにあてとかくこともいく
らへゝず其量を不知をあそしなり然ゝ〻ゝ〻ゝ文盲

の貧乏を書せるもの行ふべきこゝなれども嗚呼
日遠し如何せん其外の法師系図を瞻漢々々

○瑞龍鉄眼禅師ハ肥乃後州乃産本願寺門徒の僧い
成り志学ありて人の勝世をなりてこゝろを狂い
さしかくちハ油門ありて書物をよくよむこと
と本を写して常にかなしひ事なく門流煙霞のと
かくてハ宗義を應せんとして室にハ入ることなく
ひさんとして婚儀をなさず俗ひ殊に妻帰依をひて

院に嫁し書夜ともなく紙をかゝるぶ
しを出家し乞人間乃塵を掃ていさぎよく菩提に
入るとて云て乃に出て木菴老禅師に師事して
さらくとなりて禅師もなられ
一志ありて道に入りて雲水に遊ぶ智
識となれし摂州難波に禅院を建瑞龍禅寺大に法幢
ひさくなり猶我國にいまへらかりし一切経を板
彫せしめ天下に普く施せし其功の大に出るの古

今ためしなく仏法興隆の世僧衆ことごとく三歳の門
あへるを不律名利を躊躇し侍る類万こゝ欽和志のゝ
云為を見て豈ちさあへんや

○宋乃張忠定公里民の菓子屋を見て
いはく得しなし民曰くこれを市に買ひしと公
曰汝田里に居て自種へて不食行て惜まずやとむちうち
て並をやれり謗叢鳴呼四民の皆其業いとをこたれ
ばとゝかるゝに飢て餓に至ることなし

等しきか治教ハ天下に大事治ハ衣食にあさめ教ハ倫理
をおしむ衣食あり倫理ありハ無ハ又孔孟
へき民乃兆き治教ゆきふるさ

○加賀國大聖寺乃城にちめ山口家所住りし慶長五
年権中納言菅原利長卿至維さりし利常卿
中納言と称ス飛弾寺利治朝臣利常卿従四位下真男利明飛弾守
真男利重飛弾寺住職利重ゆるりし舎弟
利昌前田宋女を横死りしかゝ本家参議従三位綱紀卿

の二男備後守利章彼の嗣として立て大聖寺八加賀
小松と南方かゝる嶮前八兵庫に近き地なり日こゝ
累政し侍しかや領下し民困苦す今年壬辰八月の大
風洪水いとゝ荒まさるもの多かりしかを諸民ハ言乃こと
ゝ
ゆりしかとも有司許容なく却て征役多かりし故村民
いとゝ罵り歎く冬十月二百大聖寺府下に役人山城の
里谷谷等と称する猜舎小事なりて秋米検察乃と称し
歎く其数三民七百余人怠り業彼なりしかとも
ゝ
ゝ

ゝ人院内を破却し役人を追散し其後八所ゝ乃富民
おのれ業せさる者の家ふ入て財ゝす土蔵家宅焼すさふ
ゝ人ゝ物あるやかし賊宝を奪ひ米穀を移し殘忍酷
毒乃ふるまひとゝふとゝりなとゝや凡彼領七百乃民
ことゝく釣業して狼悪を成なる山中乃温湯ゝ入浴
すんとて身ゝ集ゝ病布とゝ物ゝ乃ゝ荷物とゝやゝ
ずん國ゝゝにゝ帰ゝ来ゝ術詰ゝ向ゝとゝきゝ作ゝ
前將軍家所書ゝ後所日数も立ゝ成ふかゝら駱擾ゝ

ともめさるべし紀末ともなり北越乃人々乃所為まし
傳へて書おく事し燈下に筆し傳ふ十月廿五日　此後いし
成り乃知

○乃海師撰破邪雛乃作成り日蓮堂及び笠せ海く
欲すしかとも並に敵すべき力もなくて止しかとくて乃
邪徒等さ乃為とくば乃上冊乃辯書社撰一此冬壬辰既
彫すんとも割刻氏に寄事及び海いちるく彼乃
草稿をうしみや傾て十巻乃誹義と筆して用し

く捧ふの乃も事乃邪徒いて本意なれども上冊乃
書も拾ふ事しくや又止事し部と冊乃そう作
とるん京此人詩り作りしことおうし事乃

斬邪顕正記

撰破の文答上冊邪徒乃作り出せし前冊
迫破邪顕正乃作あるにそとり作乃書題し

破誣彰實錄

十巻乃海教日乃作なり斬邪と破乃

こ乃度雖波日乃海日乃改宗乃蓮徒教乃人乃

しかはあれども邪徒等人心を惑はして談義をなすべきなり
と法華経を信じ奉る人は真言僧の火天を一時に焼し雖然乃
童と雖も聞て真言の彼宗乃偽を集りて御
ゆるさるべきなり
日蓮聖人の火の所に念仏申せば火うきもの事を物法
蓮華経数珠をもをれば海も海へ入
邪徒等市中乃銭を入て彼の童と為の法きかんきて乃し
とをとをりかへとをるまを論ずして諸人執り成を
信じて京も田舎をも〻も呼とをる信仏唱呼を
を諸宗の僧侶かくすべきなり此例もきこゆ
らん其繪をもこれを絶倒人をして落涙風をおさし
めんとすきし辛卯洛西乃邪徒別海といへる偽邪
正問答二巻を著して念仏門を謗せり文永壬辰
の仲秋潍波の大善寺燃灯の法門松誉歳的翻送問
悟集六巻を述して彼の問答の詞と遂一を新破せり
彼を見逆をこれを日蓮業の我執邪見愚癡なるこ

とうしゆし　鳴序國賊成る

○ゐ行者のともがらとせのぶごろ歳末にせんり新年にま
しりゐ行しゆ事に佛威道めこてたのうとしく臘八と
むうて薦し侍りめとるべき処八中く宵り行て明ぐ
臘ゐ年月とせひ行もいとくかりうや前後相違八
丑土のあうと夏ゐ侍ゐまうとろうゐうゐや願くハ
二空の月ゐれて三明の臺仕てしまとて香花捨て

老樹寒風曉　氷竈爲誰香

紅葩殘油涙　鐘外夢三霜

侍歌一首

世の系嘉のかぶみとむすひ初しこと昏のそうゐ油ハ朽ぬ俗
もうゐ化でをハ細ばくうて書ばく

八德水淨七樹風清

開華一象　頓證立生

大一基に

鳥唱三宗　蓮吐四光

浴金池ゐ長侍願生

門相ふ東方にかくれしかくれしかくれし

往時梅菜飄零夢

客裏醒殘又斷腸

君墓亡嗣悲故光

我思家父在殊方

蓬洲月晴連仙去

武野草荒遊子傷

相望相愁多少淚

直和陳雨幾千行

宗賦

言すらく凄涼として淚を流し行りしもとと

ゝ秋の夜寒き夜のやたいを見もうとにもうしなりは

手うるてもむ自のゆきらもしなる花人のことさふく

函とひけもとかるる春此夫をこゝろとしてそれまど

ひ毋ゆうに心ゐ引ふ引毋ゆうたまるくを

あり又雲にりとさし毋梅をうう人る化

春と為せて帝ゝもまろんかさなり毎夜ごとに又あそれ
まれ黙えて法師かと書うて初夜の孔讃念仏ゝ海
おもゝ〳〵ぶるく書なれもあつまりくるゆもりたる紅葉
月のいり海辺こそ光て物思ふ海辺夕ぐれ
師筆ゝうして

孤雲帯雨春園月　豈計今宵使意傷

共衰年老不如昔ニ　梅花殘夢一枝香

いとゝあるれまおるゝ作りし面われ

雲鐘遠々夢回昔

春雨春風莫々侵

倒指数愁三歳淚

空殘素月文梅花

ことゝもの紙油乃渡よあるの海夜の月弧かゝ文と名ふ　のこりし

○異崇羅寺乃上人歳暮ゝ詠　正徳三年

うゝすや立ぬらの寺毛山風乃海ゝ年比別と

年ゝうゝてらん

[illegible]

今朝ハ[illegible]

乃とけしかはるさとにすかの

御月[illegible]春廿[illegible]

○或人京へ去年の秋のくれ[illegible]

書しをおもひ出して[illegible]

[illegible]

立春　正月十日　の日のくれ[illegible]

明和[illegible]

○或日蓮義の僧いろ〳〵禁制義述し貧迫きて貪窮

狂氣し臨終にのぞみて死せりと聞彼徒毎日

偽言成けりと人々語ひ迫師をそそ迫師酬酬の

反しは蓮社を苦し常不退轉の念佛を修しむ

まる北郭にをまる夏陽やとして念佛変化をしむ

貪窮とふへきや　常念佛料　数百金ちり　日々の終事乃時自筆

とて書して曰弥陀本誓と不疑無間わハ浄ちて

如ハ埠焼のこと

[illegible]

と詠し称名して終りを取る
嗚呼とそなへし日徒らに善智識をとりて似げなき
詩詞いりかしかも其罪なき者いとあさましく彼
堂死に臨んで正しく往者を学び念仏者よりもしるべ
項日 辛卯 仲冬 雑賀の珂然和尚 生玉法泉寺 新撰往生傳と
巻を述して世に行はるる題験いちしるき者に
して敢て虚言に非ず其人九十八人夫天下に廣き
覚えてこれをのんや

此書冊巻に證誉大僧正 増上寺 貫首を勅して以て因寂乃前
口占して曰
我幸に古布信法示信機故郷西山日飯心常欲飛
宝永七年 閏八月 十八日 奄然として化す 二十日 閑維舎利
とくしゅして一百余粒其色白キ云々
来誉上人 泉州 菩提寺 阿内國安福蓮社の口観堂
の列 西海を望て日沙観す蓮月倡乃ち偈を題
其詞曰く
恵日耀海老雲 滿天 称名憶佛来迎現前

願[illegible]西に向日を拝[illegible]
元禄十四年 正月十日合掌念仏して化すと云

[illegible]日徒に猶あり[illegible]邪[illegible]附て云

[illegible]

○高祖大師知恩講念誦　今上湖心百韻

伏以我　大師現生於山陽英州而廣導西利九品易
往唱寂於神都華頂而五輝東漸童謨徽号在
世八十箇年化風敢高普天滅後五十餘歳法
燈永傳遐邇　王公士庶尊信教勅鄙古今
称念聖号則鳳扆而屋皆是無不大師遺
跡也嗚呼不改十悪之身而踏珍観金臺敷
花不用五濁之時而遊玉沼瓊池滿月者柳亦
誰之恩乎精誠酬報実天冠極越者茶毘
知恩詳月別時焚香齋供諷経称号謹以伸
慙謝俯願　大師慈眼遥鑑顔容微帆哀愍
摂受周放無辺恵光恒照塵沙法界使十方一

切含識同得雲薗共倍無生於此頌曰

無底無辺切徳海

普天共仰大悲高

香巖塲裏玉梅凋

軍持月浮一白毫

正徳癸巳孟春念五敬白

○中天和尚父浄春法師九十一歳の齢にめい京よりくるしき年

くるしきしるしをうけ給ひ

一別癸春信息賒　相逢相語屑驚花

馬蹄愁踐西山雪　蒼星空看東海霞

和尚涙筆洒洒て和てほ

望郷出洛路程賒　世上有春心未花

衰老可憐双眼涙　愁懷彷彿暮天霞

世に春とつくる里ぬ草の御ちものとて

まゝ和尚返一歳暮の歌とてかくし

一日まつ十年ふるかの年社かへ見もやすらん

春に時ならぬ梅を

すあすむ世のあるじやかの玉の春にかゝる臺所の梅

日時又詩一首

豈將風月作生涯　清味無能度歲華

睡起日高人不到　山中春信有梅花

吊和とまゝすとて田舍ずまひ

河洛風光豈有涯　故情我亦憶京華

柳分春色衡門綠　誰見孤村一朶花

○或業門の菴に梅花のさかりなるを

むかしかゝる所にやさしき主の僧　孤柳

捨し身にすまれんあれ香ひうる

と聞しるとに

ゆゑなくて思ひそめ折しとゝ

○從行者乃杖ざし　をて茶毘喫さるゝ多く終て

讃せられて人のもとめ侍りし

雖次浮生槐國夢　貪春霄半睡榮華

瘦筋故疾亦可我足更坐来一椀茶

太神宮造酒物忌荒木田重治年のころ

冨俵（神馬草枕もしひ多ゝ）さんぎちやゝ（二寸半廻小木之後と結合しなもの）及ひ

たちハゝと度會乃時月いふと豆腐ゝおくり

ミせ作りしゝ

神風や五代ゝ元ゝ春の

さゝい各國の郷俗正月ハ處くゝ餅をくき

多ゝ者の祝ひとゝ所ゝ

奈良

の庭竈を

余別ハなし　我郷里えゝ蛤のハ地大根　けゝ田作

乃けつゝ鱠なしゝそ田舎えゝと信濃宮（宗良親王）

の御裔尾西藤波の里にのゝ入らせゝ

十二月ゝてえ正月ゝ

浪合記ゝ多ゝ

ゝ伝ゝ今に風俗ゝ傳ゝ

関東の御いと井ゝ

奉り道ゝ

清頂ゝ朝庭乃

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan